

フィリップ・ドゥクフレ

インタヴュー＝桜井圭介
Interviewer: SAKURAI Keisuke



Philippe Decouflé

スペクタクルと映画をミックスした

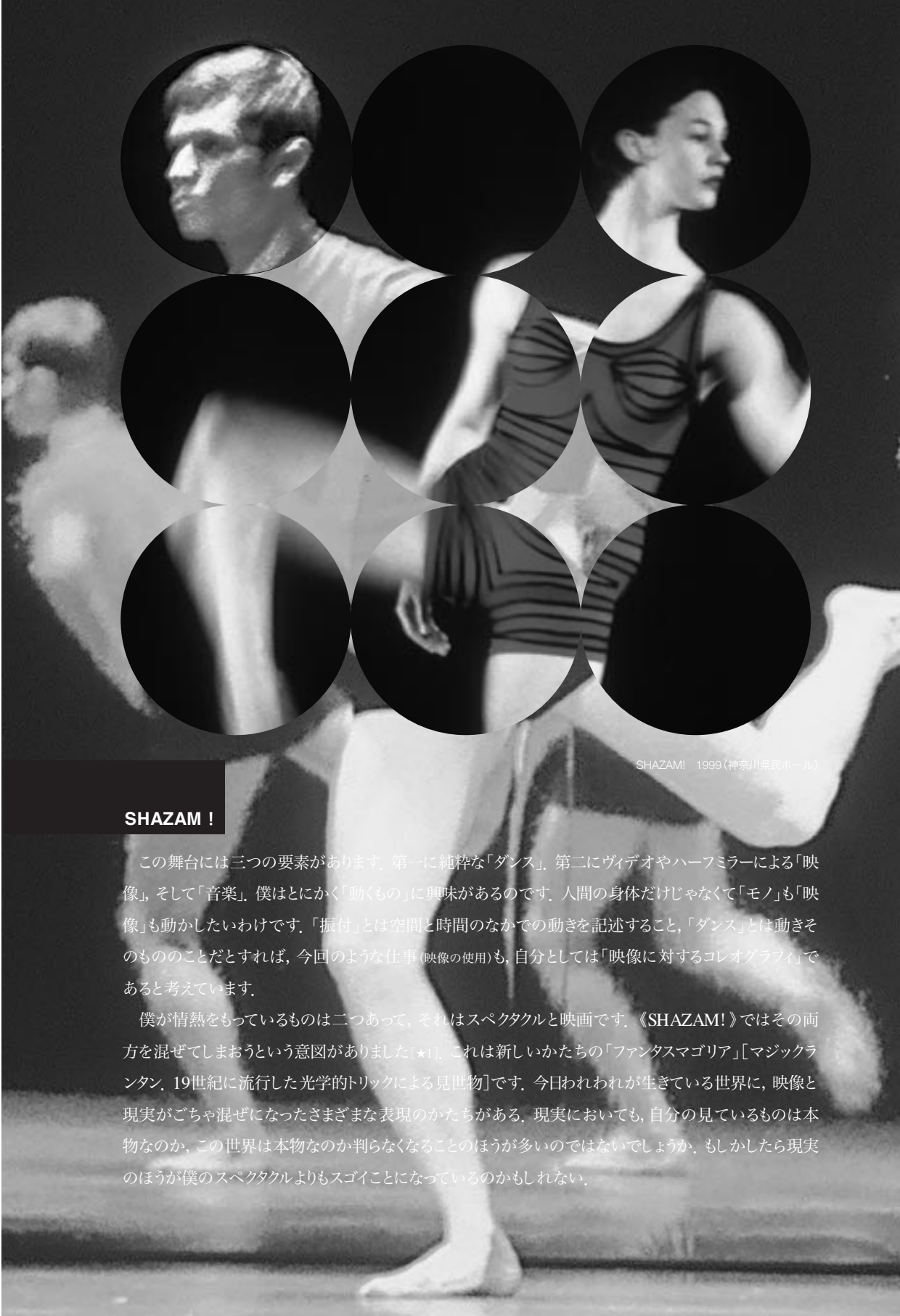
SHAZAM!は、新しいかたちの

ファンタスマゴリアです。



Mixing spectacle and cinema, SHAZAM! presents a new form of phantasmagoria.





SHAZAM! 1999(神奈川県民ホール)

SHAZAM !

この舞台には三つの要素があります。第一に純粹な「ダンス」。第二にビデオやハーフミラーによる「映像」、そして「音楽」。僕はとにかく「動くもの」に興味があるのです。人間の身体だけじゃなくて「モノ」も映像も動かしたいわけです。「振付」とは空間と時間のなかでの動きを記述すること、「ダンス」とは動きそのもののことだとすれば、今回のような仕事(映像の使用)も、自分としては「映像に対するコレオグラフィ」と考えています。

僕が情熱をもっているものは二つあって、それはスペクタクルと映画です。《SHAZAM!》ではその両方を混ぜてしまおうという意図がありました[*]。これは新しいかたちの「ファンタスマゴリア」[マジックランタン、19世紀に流行した光学的トリックによる見世物]です。今日われわれが生きている世界に、映像と現実がごちゃ混ぜになったさまざまな表現のかたちがある。現実においても、自分の見ているものは本物なのか、この世界は本物なのか判らなくなることのほうが多いのではないのでしょうか。もしかしたら現実のほうが僕のスペクタクルよりもスゴイことになっているのかもしれない。

しかし、いろいろなテクニック、いろいろなメディアを混ぜるということは、いまやあらゆるアートで普通に行なわれていることであって、その意味では僕のやっていることもそんなに珍しくはないし、逆にダンスのほうが遅れているということなのかもしれません。

MIXING

いろんなものを混ぜ合わせたいのです。15歳でサーカス学校に入り、その後マルソーのマイム学校にも行ったし、バレエも、ジャズ・ダンスやモダン・ダンスも習った。でも僕は何かのジャンルを究めたというわけではありません。何のスペシャリストでもない。僕は自分の職業を「ミキサー」だと思っています。

初期の作品には「ロック」というコンセプトがあって、繰り返し(リフ)の構造を用い「短いもの」にすることによって、ロック・ミュージックのようなエネルギーを伝えようとするものでした。次の段階で考えたのは、夢に近い幻想的な世界をつくりたいということで、理解させるというより観客のイマジネーションを刺激する、彼らが自分で夢を見るための刺激になるようなものをつくらうとしたわけです。そして、いまやろうとしているのは最先端のメディアをいかに自分の作品のなかに組み込んでいくかということです。映像と人間の身体の動きに関して言えば、まだまだ発展させるべきものはたくさんある。例えば、「ホログラムを舞台で使いたい!」と思うわけです。僕はそうしたリサーチをやるための小さなラボを持っているのですが、まだ手作りの日曜大工的な段階にとどまっていると言わざるをえない。大企業が支援してくれるとか、研究者で興味をもってくれる人が協力してくれるといいんですが。

身体・ダンス

確かに僕自身の興味は、最近は映画とか映像のほうへより傾いてきているかもしれません。肉体に興味がないわけではないのですが、それはさまざま違い、個性をもっている点においてです。僕の大好きなトッド・ブラウンの映画《フリークス／神の子ら(怪物団)》、あれを見ていて思うのは、いわゆるノーマルな身体よりも、むしろアブノーマルであったり人と違った身体のほうに興味があるのではないかということです。以前、モーリス・ベジャールのところでどうしても踊りたいという女性のダンサーが、オーディションで胸が大きすぎると言われて手術で胸を切ってしまったという話を聞いて、ひどい話だなと思いました。

クラシック・ダンスとの比較で言えば、どれだけ速く回転するかとか、どれだけ高く飛ぶかということとは反対のことを僕はや





ろうとしているし、社会の問題だとか男女の問題を表現しようというのが前の世代のコンテンポラリー・ダンスだとするならば、僕はそういうことには興味がありません。僕自身はかなり曖昧でいい加減な定義によると、「ダンス」とはありとあらゆる「実用的でない動き」のことではないでしょうか。例えばコーヒー・カップを渡すときに、普通に渡せば「実用的な動き」ですが、こんなふうにしたら[直線コースを取らずにくねらせる]、その場でダンスができてしまった、というのが僕の考えです。

映画の記憶

子供の頃はハリウッドのミュージカル映画をしょっちゅう観ていたので、記憶に残っているわけですが、アルベール・オリビエの仕事をやったときにはバスビー・バークレーを何度も見直しました。彼は集団のコレオグラファーとして最高の人だと思います。実際、500人や1000人の人間を振り付けなければいけないときに、自分の「クラシック」に戻って研究したことはよかったと思う。《プティット・ピエス・モンテ》のインスピレーションの一つは、フレッド・アステアが壁や天井を使って踊るシーンです。それをなんとか舞台上で実現できないかと思い、回転するセットをつくってみたり、レールを使って人間を天井からぶら下げるような仕掛けをつくったわけです[★2]。今回の舞台でも「鏡のシーン」[★3]はオーソン・ウェルズの《上海から来た女》ですしね。

ただ、アメリカ的なエンターテインメントは、「押しつけがましさ」というか、支配的な面が強いのではないのでしょうか。僕の場合は「ここで笑え」と意図しているわけではない。しかもこれはエンターテインメントであると同時に芸術的なリサーチでもあるわけです。僕の作品の「諧謔的」なところは多分に「フランス的」だと思います。影響としてはダダとかシュルレアリスムなどの絵画や映像作品ですね。それと、メリエスは大好きです。どちらかという文字よりも視覚的なものの影響のほうが強いのです。打ち明けてしまうと、本を読むことはあまり好きではないのでね(笑)。

[1999年3月27日、神奈川県民ホール]

■註

- ★1—例えば、舞台上のダンサーとスクリーンに映し出された映像の中のダンサーによるデュエットはその典型だろう。
- ★2—ちなみに《SHAZAM!》にも、組体操による「人間ピラミッド」の曲芸と思いきや、単に床に寝てのを上から撮影しただけ、といった人をついた映像シーンがあった。
- ★3—等身大のハーフミラーの三面鏡の前で踊る。するとダンサー本人とその鏡像、鏡像の鏡像、さらに鏡の後ろには同じ衣裳を着て同じ動きをするダンサーがいて、さらにそのダンサーの鏡像、その鏡像の鏡像が……。しかも、鏡にはスリットがあり、前後のダンサーが入れ替わりさえるのだ。隣り合わせの錯視効果によって、映像は生身に、そして生身は映像に引っぱられ、どちらも「プログラム」のように、つまり2.5Dになってしまうのだ。

フィリップ・ドゥクフレ——1961年生れ、フランス 振付家・演出家。主な作品＝《コデックス》(1986)、《カランパ!》(映像・1986)、《トリトン》(1990)、《プティット・ピエス・モンテ》(1993)、《SHAZAM!》(1997)
 さくらい・けいすけ——1960年生まれ。ミュージシャン、ダンス批評。ソロ・アルバム＝《IS IT JAPAN?》《ヒネミ》、コンピレーション＝《ici Tokyo》《YMOのカバ》、共著＝『ダンシング・オールナイト』(NTT出版)、『西麻布ダンス教室』(白水社)など。月刊誌『太陽』(平凡社)にダンス批評連載中。遊園地再生事業団の舞台音楽なども担当。

